

アンジュアン島紛争の動向 —コモロ連合国における地域対立の新たな構図

花淵馨也

● はじめに

コモロ連合国 (Union des Comores)、以下、コモロ) では、二〇〇七年四月以降、連邦を構成する四つの島の一つであるアンジュアン島の大統領改選をめぐる、連合国大統領アーメド・アブダラ・サンビ (Ahmed Abdallah Sambi) と、アンジュアン島前大統領モハメド・バカル (Mohamed Bacar) との対立が続いてきた。二〇〇八年三月二五日、ついに連合国政府は軍事的解決に踏み切り、政府軍はアフリカ連合から派遣された多国籍軍との合同による「コモロの民主主義」(Démocratie aux Comores) 作戦によりアンジュアン島へと進攻し、短時間のうちにほぼ全島を制圧した。本稿では、このアンジュアン島紛争が軍事的衝突へと至った経緯について報告するとともに、コモロのきわめて不安定な政治状況を生み出してきた地域対立の構図の新たな動向について述べる。

● 軍事的解決へと至る経緯

今回の紛争の発端は、二〇〇七年六月に

実施される予定であったアンジュアン島大統領の改選をめぐる混乱であった。コモロ連合国は、領有権をめぐるフランスと係争中であるマイヨット島を除くと、グラランドコモロ島、アンジュアン島、モエリ島の三島から構成されるが、最大の面積と人口をもつグラランドコモロ島の政治的優位に対する他の島の反発が、一九七五年のフランスからの独立以前から存在してきた。その対立は一九九七年にアンジュアン島、モエリ島両島の分離独立運動へと高まり武力衝突へと発展したが、二〇〇一年にアフリカ連合の仲介により和解調停が結ばれ、各島の自治権を大幅に強めた新憲法が制定されることで国家分裂の危機が回避された。新憲法では三つの島から四年の任期で順番に連合国大統領を選出するとともに、各島にも大統領と自治政府が置かれることとなった。アンジュアン島バラカニ村出身のモハメド・バカルは、フランスやアメリカでの軍務経験をもつ元憲兵隊大佐である。一九九七年から続いたアンジュアン島の分離独立運動において分離派のリーダーの一人として活動し、二〇〇一年三月には辞任

した分離派指導者アブダラ・イブラヒム (Abdallah Ibrahim) から地位を引き継いだサイード・アベイド・アブデレマニ (Saïd Abeïd Abderemèn) に対する軍事クーデタを起こし、島の臨時指導者となった。新憲法のもとに実施された島の大統領選挙において二〇〇二年四月にアンジュアン島の若い大統領となる。バカルは、三〇〇から八〇〇名と推定されるアンジュアン島憲兵隊と元兵士の支持を得て、次第に軍事的圧力を背景とした独裁政治を行うようになった。

一方、二〇〇二年の選挙で選出されたグラランドコモロ島出身のアザリ (Azali Assoumani) 大統領の後、二〇〇六年五月の選挙によりアンジュアン島出身のサンビが連合国大統領となった。アンジュアン島の大企業家であり、多くのアンジュアン島民からの支持を受けたサンビ大統領だったが、バカル派が要求するアンジュアン島の自治権と利権をめぐる、しだいに対立するようになる。特に任期切れが近づいた二〇〇六年以降、バカルは再選の意向を示し、サンビへの批判を強めた。

各島自治政府の大統領選挙に先立ち、バカルの再選に向けた動きを封じるため、二〇〇七年四月二十六日、コモロの憲法裁判所はバカル大統領の五年の任期が四月二十四日で期限を過ぎているとして退陣を要求するとともに、大統領選への立候補を承認しなかった。サンビ大統領はアンジュアン島臨時大統領として、アンジュアン島国会議長のカーンビ・フマディ (Houmadji Kaam-*Di*) を指名したが、その後、五月一日には新たに島の経済産業大臣ゾワヒル・ハリデイ (Dhoirou Halidi) をアンジュアン島臨時大統領として指名し直した。しかし、バカル派はこれをサンビの傀儡と批判し、官邸を明け渡さなかった。

連合国政府による大統領選挙の開催要求に対し、バカルは選挙管理委員会とアフリカ連合から派遣された選挙監視団がアンジュアン島に上陸することを拒否した。五月二日には、連合国政府軍 (Armée Nationale de Développement = AND) とバカル派のアンジュアン島憲兵隊 (Force de Gendarmerie d'Anjouan = FGA) とが市街で銃撃戦を行う事態に発展し、二名が死亡、一二名の連合国政府軍兵士が拘束された。また、アンジュアン島内でもバカル派と反バカル派との対立が起き、バカルは憲兵隊の軍事的圧力による支配を強めていった。

グラランドコモロ島とモエリ島の大統領選挙は、五月一日の第一次投票、そして二四

日の第二次投票が実施された。しかし、バカルの抵抗を受けて、連合国政府はアンジュアン島での選挙を当初は六月一七日にさらに二四日にまで延期せざるをえなかった。バカルはこの延期にも従わず、六月一日に自ら選挙用紙を印刷して独自に投票を実施し、六月一日には九〇%以上の島民の支持を得たとして大統領への再任を自ら発表した。

コモロ連合国政府およびアフリカ連合は、バカルの選挙を無効なものと批判し、アフリカ連合は公正な選挙を開催するために、選挙監視団としての軍隊派遣の意向を示した。連合国政府はガソリンの供給をストップするなどアンジュアン島に対する制裁処置を行ったが、膠着状態が長く続くこととなる。事態に懸念をもったアフリカ連合および国連は代表をアンジュアン島に派遣して説得しようと試みたが、バカルは和解交渉を拒否し続けた。二〇〇七年六月二五日、アフリカ連合の主要国、タンザニア、モザンビーク、モーリシャス、セイシエル、ケニア、マダガスカル代表は、公正な選挙の開催をバカルに要請し、「選挙および治安支援部隊」(Electoral and Security Assistance Mission = MAES) による軍事的介入もありうることを表明した。

二〇〇八年を迎えても事態は進展せず、それまで交渉による解決をコモロ政府に要求していたアフリカ連合は二月二〇日の会合において、「コモロの領土的、主権的統

一を維持するため」に軍事介入による解決を支援する方針を打ち出し、リビア、スーダン、セネガル、タンザニアから軍隊の派遣支援が決定された。また、フランスがアフリカ連合多国籍軍の輸送支援と物資の提供を申し出た。二〇〇八年一月には、連合国政府軍は軍事的制圧の準備を開始し、アンジュアン島への上陸に備えて隣のムワリ島で訓練を始めた。三月には、アフリカ連合からの派遣軍がコモロに到着し、連合国政府軍と合流した。

二〇〇八年三月三日、サンビ大統領は「アンジュアン島に共和制の法的秩序を回復するため」(pour rétablir la légalité républicaine à Anjouan) に軍事作戦を承認したことをテレビ演説で明らかにした。さらに、二四日には、部隊の上陸に備えて、市民に外出を控えるよう促すビラがヘリコプターからアンジュアン島民に撒かれた。三月二五日未明、連合国政府軍約四〇〇名、スーダンやタンザニアなどから派遣されたアフリカ連合の多国籍軍約一〇〇〇名がアンジュアン島に上陸し、首都ムツアムドゥ、副都市ドモニエへと進攻し、大統領官邸および主要な施設を制圧した。アンジュアン島では約四〇〇から五〇〇名とされる武器を装備したバカル派兵士が攻撃に備えていたが、交戦は短時間で終結し、犠牲者はほとんどでなかった。民間人による抵抗もなく、バカル派に批判的なアンジュアン島民の多くが上陸部隊を歓迎する姿がフランスのテ

レビ放送で流された。その日のうちに、コモロ政府はアンジュアン島をほぼ制圧したと宣言を出した。

政府軍の上陸前夜、バカルは女装して小さな船に乗り込み、二三名の腹心たちとともに隣のフランス領マイヨット島に逃亡し政治亡命を求めている。二七日、フランス政府は政治亡命を認めるかどうかは協議中とした上で、武器を所持した不法入国の容疑でバカルらの身柄を拘束し、レユニオン島に移送した。

三月二五日には、連合国政府副大統領のイキリル・ゾワニン (Ikilou Dhoinine) がアンジュアン島の臨時指導者に指名された。さらに、三〇日には、アンジュアン島上告裁判所長のライリザマニ・アブドゥ・シェイク (Latizamane Abdou Cheik) が臨時大統領に指名され、三カ月以内に新たな大統領選挙の実施が公表された。以上が、二〇〇八年四月の時点におけるアンジュアン島紛争の顛末である。

●対立の新たな構図

コモロ連合国は、一九七五年の独立以来、七八年まで続いた社会主義革命の混乱、八〇年代の白人傭兵による度重なるクーデタと闇の政治支配、九〇年代には絶望的となった経済的貧困と汚職による政治腐敗などにより、きわめて不安定な政治状況に置かれてきた。政治的不安定の要因の一つは、フランス植民地からの独立以前から存在し

ていた島間での地域対立である。コモロ諸島は四つの島から構成されるが、独立時にフランスがマイヨット島の支配を続けたため、実質的に三つの島が国家を形成してきた。マイヨット島がフランスの経済的支援を受けて安定した状態にある一方で、独立したコモロではほとんど産業が発達せず、国家経済は膨大な海外借金を抱えて破綻の道を歩んできた。国家の未来が描けない状況のなかで、九〇年代半ばから分離独立運動の動きが顕著なものになった。フランスに残留したマイヨット島への憧憬が、グラントコモロ島が政治の実権を握り、経済的に優遇されてきたことに対する他島の不満と結びつき、コモロ政府に対する反発として噴出したのが、アンジュアン島とモエリ島がコモロ国家からの離脱とフランスへの再帰を求めた一九九七年の分離独立紛争である。アンジュアン島の抵抗は政府軍との武力衝突に発展し、アフリカ連合の仲介による和解交渉は二〇〇一年まで長引いた(参考文献参照)。

今回のアンジュアン島紛争は、グラントコモロ島に対するアンジュアン島の反乱という地域対立の構図としては同じ基盤をもつものであるが、一九九七年に発生した分離独立紛争とはいくつかの点で大きく異なっているといえる。一九九七年の紛争は、公務員への給料未払いに対するデモを発端として発生したものであり、中央政府に対するアンジュアン島民の不満と反発が、仏

領マイヨット島の経済的發展に対する羨望と合わさることで島民の多くに支持された一つの運動へと発展していったものである。今回の紛争の根底にも同じような民衆の反発があることは確かであるが、今回の紛争は、指導者であるバカルが軍事的力を背景とし、アンジュアン島民に対する軍事的圧力によって強引に行動を起こしたという点で大きな違いがある。バカルの主張も、直接的にコモロ国家からの離脱ではなく、アンジュアン島の自治権と大統領の地位を維持することであった。バカル大佐という軍事的力をもった若い指導者の無謀な国家への反逆に対しては、アンジュアン島内においても批判があり、反バカル派によるクーデタ計画や衝突がたびたび起こり、粛清として拷問や処刑などによる人権侵害が行われたとされている。バカル派による弾圧を逃れ、二〇〇七年六月以降、約二五〇〇人以上のアンジュアン島民がグラントコモロ島へと逃亡したと推計されている。

第二に、前回の分離独立運動と異なるのは、今回の紛争が二〇〇二年以降の新たな連邦体制のひずみから発生したものであるという点である。小さな島国に四人の大統領があり、四つの政府が機能しているという状況が生み出した混乱は、二〇〇二年に新体制がはじまった当初から、連合国政府と各島の利権をめぐる対立が表面化し、官庁だけでなく病院や学校などが機能しないという事態に陥った。二〇〇六年にアン

ジュアン島民からも圧倒的支持を受けて選出されたサンビ連合大統領だが、国家と地方との政治的バランスをとることが困難となり、アンジュアン島民からの不満がしだいに大きくなり、もともと分離独立を主張していたバカル派との対立が表面化することになったのである。今回の事件は、連合国政府が地方自治政府を制御する能力を持たないことを証明することとなった。

第三に、今回の事件で、アフリカ連合とフランスという外部からの軍事介入があったことは、コモロだけでなくアフリカ諸国の今後の政治において大きな意味をもってくるだろう。一九九七年から二〇〇一年にかけて続いた対立では、アフリカ連合が介入し和解決を進めたが、多国籍軍による軍事的解決には至らなかった。しかし、今回は、早い時期においてアフリカ連合は「民主主義の維持」のために軍隊派遣を表明し、コモロ側の要請という形で軍事的介入を行った。これに対しては、アフリカ連合が、国内問題への内政干渉の境界を越えて、アフリカ諸国の「民主主義の警察」となる傾向の危険な前例を作ったとして危惧する声も上がっている。

また、旧宗主国であるフランスがアフリカ連合軍の輸送や物資援助を買って出た一方で、バカルの身柄を保護し、コモロへの送還を保留していることは、コモロ国民の複雑な反応を引き起こしている。旧宗主国であり、最大の援助国であり、独立後もコ

モロの政治に大きな影響力をもち、そしてマイヨット島の領有をめぐる係争中であるフランスとコモロとの関係は幾重にも矛盾をかかえたものである。今回のバカル派の反乱についても、実は陰でフランスがバカルを援助しているという噂が流れていた。フランスがバカルの身柄を保護し、すぐにコモロに送還しないという事態は、この憶測を裏付けるものだとする見方を強めた。三月二七日にはコモロ国内で、そして三月二九日にはフランス在住のコモロ系移民がパリで、それぞれフランス政府の対応に対する抗議デモを行っている。フランスという大国に翻弄されてきたコモロの歴史がまた繰り返されたのである。

●おわりに

以上、アンジュアン島問題が軍事的解決に至った経緯と、その背景に存在する地域対立の新たな動向について述べた。コモロ国家内における地域対立の構図と、コモロに關与する国際勢力を含めた政治構造は新たな展開を迎えたといえるだろう。今回の事件では、資源も産業も乏しく、海外援助に依存した狭い領土に実質的に四人の大統領を擁する極小国家の新たな連邦制がうまく機能しえず、大きな摩擦を招くという事態が改めて浮き彫りになるとともに、コモロ政府が国内問題として自律的に地域対立を解決する力をもたず、アフリカ連合やフランスという、巨大な外部の力に服従する

ことよってしか国家をコントロールしえないという事実が露呈することとなった。外部の介入による軍事的な問題解決は、見方によってはアンジュアン島の自治権の否定であり、コモロ国民自身による民主主義的対話の可能性を否定するものにもなりうる危険性をもつ。今回の軍事的解決は、コモロ国内での地域間の対立をより困難な段階へと進めることになり、地方自治政府間の平和的対話による連邦国家の統一という理念に、ますます大きな課題を残すことになったといえるのではないか。

(はなぶち けいや／北海道医療大学
大学教育開発センター)

《参考文献》

- 花淵馨也「幻想の終焉―コモロにおける分離独立運動」(『アフリカレポート』第二六号、一九九八年、アジア経済研究所) 二七―七ページ。